

活動状況報告（8月）

文化芸術コース 4期生 北浦 由花里

ポーランドは夏真っ盛りになりました。欧米では新型コロナウイルスはすっかり忘れ去られ、観光などの経済活動が元通りになりました。日本とのギャップに戸惑いますが、留学している身としては、通常通りに研究活動ができるのでとてもありがたく思っています。

さて、8月は主に修士論文を第一に取り組んでいました。9月に大学へ提出しなければいけなかったのも、この8月は、これまで調べてきたことの総まとめの期間となりました。文献を探しに図書館へ通ったり、私のスーパーバイザーであるピアノの教授はもちろん、他のピアノ科の先生方にも意見を伺い、意欲的に取り組むことができたと思います。特に私のピアノの先生には大変お世話になり、何度も内容について確認していただく機会を設けていただきました。行き詰まることもたくさんありましたが、論文の中身はもちろん、英語の単語や文法の訂正など、様々な面で助けていただきました。

以前も少しご紹介したかと思いますが、私はポーランド発祥の舞踊もしくは舞曲、歌である「ポロネーズ」について研究していました。ポロネーズはポーランド発祥であるものの、「ポロネーズ」という単語自体はフランス語に由来しています。ポロネーズの起源は、宮廷で生まれた舞踊と一般的に考えられていて、この起源は、1573年にポーランドのクラクフで行われた戴冠式で、ポロネーズが踊られたという記録に基づいています。

ダンスとしてのポロネーズの特徴は、男女がペアで優雅にゆったりと歩き回ること、マズルカ（※同じくポーランドの民族舞踊・舞曲）のように飛び跳ねたりはしません。ダンスの基本ステップでは、膝を少し曲げながら1拍目に強くステップを踏む必要があります。このポロネーズの優雅な踊りの特徴やステップのリズム感は、舞踊音楽としてのポロネーズに受け継がれています。こういった知識は、ピアノポロネーズを実際に演奏する上でとても役に立つようになりました。（ポロネーズは飛び跳ねるような踊りではないので）、ペダルの踏み方から間合い等、私の演奏面で大きく変わったと思っています。

これまで、このポロネーズにおいては”F. ショパンがこのジャンルを芸術音楽として確立した”という事実は知っていましたが、彼が生み出した革新的なポロネーズの素晴らしさには改めて驚かされました。ショパンの少し前の作曲家から、彼の後継者と言われるようなポーランドの作曲家のポロネーズを比較し、流行したスタイルや雰囲気、性格、技巧的な難易度など多くのことを発見することができました。また、ポーランドの人々にとってのポロネーズの大切さも、肌で感じることができました。多発する国内外での戦いにより不安定であったポーランドにとって、ポロネーズはポーランドの象徴で希望であったと思います。事実として、19世紀には数多くの素晴らしいピアノポロネーズが残っていて、政治家兼音楽家であった作曲者がたくさんのピアノポロネーズを作曲しました。F. ショパンがパリに移り住んだ後に、勇ましいポロネーズを書き上げたのも、ポーランドから亡命した芸術家たちに「ポーランドの栄光」を思い出させるためであったのではないかと考えています。

130ページ程にわたる修士論文を書き上げ、自分の知識の財産となりましたが、今後仕事をしていく上で役立てていけたらいいなと思います。8月は修士論文に力を入れましたが、来月はピアノの試験に向けて準備していきたいと思っています。90分のピアノの試験ですが、そのうち40分程度は論文で研究したポロネーズを演奏します。また、ピアノの試験の直後には、論文に対する口述試験があります。精神的にも体力的にも大変な試験になるかと思いますが、留學生活の成果を発揮できるように頑張りたいと思っています。留學生活も残りわずかとなってきました。あと少しではございますが、温かく見守っていただけますと幸いです。

